

いつまでも、ささいなことで笑い合いたい。たくさん話をしたい。一緒にお出かけしたい。けれど、会うたびに変わりゆく祖父母の姿は、時間は有限であると示しているようで、私は寂しくなりました。

冬休み、新幹線で四時間かけて母の実家を訪れました。数ヶ月会わなかったただけなのに、祖母は椅子に座りっぱなし。以前と比べて、少しだけ身体を動かさなくなっただけで、あとは変わらない。しかし、人の支えなしでは移動できなくなった祖母を見るのは衝撃的で、「おしゃべり」を楽しみに来たのにも関わらず、私は祖母に背を向けてテレビばかり見ていました。祖母の気持ちを考えることもなく、ただ、自分を正当化する言葉で頭の中がいっぱいでした。その日の夜、私は見てしまいました。母が広いリビングで一人、大粒の涙を流しているところを。このとき、「時間」や「祖父母」そして「私の気持ち」に向き合わなければならぬと、自分自身に言い聞かせました。

冬休みの期間中、女子四人で思い出をつくろうと私から提案しました。そして、家族に許可をもらい、祖母の腕や腰を私と妹で支えながら、よく四人で通っていた近くの温泉施設に行きました。温泉について調べ、温泉は一回の入浴でのリラックス効果が高いと知ったからです。「祖母のために……」の一心でした。四人でたくさん「おしゃべり」したことは、冬休み一番の思い出になりました。永遠にこの楽しい時間が続いてほしかったです。その時の祖母の笑顔、母の喜びに満ちた顔は、私の心を温めてくれました。久しぶりに見たこの笑顔は変わらない優しさに包まれていたのです。

「最後かもしれないね。ありがとう。」

祖母が帰り際に言いました。

「そんなわけないやん。なに言ってるん。」

笑顔で答えた私たちに、少し涙を浮かべた祖母は、私たちの手をぎゅっと握り、何も言わずに歩き始めました。

その後、祖母が施設に入り、一段と元気がなくなったのは祖父です。そこで、今年八十歳になりますが、車で何時間もかけて私たちが住んでいる街に来るようになりました。八十歳という言葉が口にする祖父自身や両親は、とても嬉しそうな顔をします。まさに歳を重ねることは素晴らしいことです。真面目で謙虚な祖父は、歳を重ねたり、環境が変化したりしたことにより今までとは少し違う祖父になりました。数日一緒に過ごしていたある日、突然「そっけない」と言われました。悲しくてたまりませんでした。始めは歩み寄ろうとしましたが、少しわがままになる祖父に対して、徐々に正直面倒くさいと思うようになりました。「面倒くさいと思うなんて最低だ」とわかっていても、そう感じてしまいます。面倒くさいと思っていた私は、大好きな祖父に長生きしてもらうために、元気な私が快適な環境を作っていきたいと考えるようになりました。

祖父母が変化していくのだから、私も変化すればいいじゃないか。身近な人が歳を重ねていくことは喜ばしいことでもあります。悲しいこともときにはあります。祖父母と過ごす時間には限りがあるのだから、一瞬一瞬を大切にしなければなりません。

さらに、いつまでも変わらないものを大切にしたいです。私は、「幸せ」という感情があふれ出す家族の「笑顔」は、なにより、大切なものであると気づきました。大切なものは忘れません。たとえ、祖父母が思い出せなくなってもそのときは、「会話」で伝えたいです。

感謝を胸に、いつまでも幸せな時間を家族と共に過ごします。家族に教えてもらいました。過ぎゆく時間は美しいと。